

能動的学習による社会福祉援助技術演習の授業改善について

増山道康*

About the Lesson Improvement of the Social Welfare Assistance Technical Exercise by Active Learning

Michiyasu MASUYAMA

社会福祉援助技術演習において介護型車いすを使用して、身体障がい又は高齢による歩行困難とその介助を学内で疑似体験した。その結果をKJ法を用いて特性要因図を描くことでまとめ、さらにパレート図を作成した。こうした一連の演習によって、学生は、単に障がいや高齢について一定の理解をするだけでなく、そうした状態による社会参加や生活上の困難の状況も理解することができた。また、学内における障害を持つ学生が不便や困難を感じる場所や状況をまとめることで、それに対する解決策も提案できるようになった。結果として、社会福祉現場実習において、実社会のバリアをより深く理解することが出来る様になり、バリアフリーやユニバーサルデザインといった概念をより具体的に理解することが出来る様になった。

キーワード：能動的学習、車いす疑似体験、特性要因図、パレート図

1 はじめに

厚生労働省が示している社会福祉援助技術演習のカリキュラムの中にアセスメント、効果測定という項目がある。その実技指導としてチームアプローチ、社会資源の活用調整開発や地域ニーズの把握が含まれている。

社会福祉援助演習（以下演習と記す）は、実習指導、現場実習と関連づけて授業展開を行うが、実習の事前学習として、グループワークや社会資源の理解を行っている。その中で、KJ法を用いた体験の把握と結果の分析は、学習効果を高めることが可能な方法と考えている。

2 授業展開

2.1 使用した技法

演習の中で、介護型車いす体験をおこなっている。

前任校は、住宅街に立地していたため、一コマで一街区を一周できた。そこで、実際に街区の中で車いす操作が困難な場所や、車いすでは利用しにくい施設、設備を点検した。

しかし、本校は校地外周の起伏が激しく、一コマで外周を一周出来ない。そこで、学内において、車いす操作困難箇所や利用しにくい設備等を点検している。そうした箇所や設備を写真に撮り、車いす体験直後の援助技術演習中で、それらを見ながら、KJ法を活用して特性要因図（フィッシュボーン・ダイアグラム：以下FBDと記す）を作成し、さらにパレート図（以下P図と記す）を作成する。

ここで、技法について解説をしていく。KJ法は、文化人類学者川喜多次郎が考案した経理法で、課題に関する情報をカード1枚に一つ記入していき、類似するカードをグループ化することで、課題解決の要素を発見していく¹⁾。演習では、写真撮った箇所、設備や、記憶している箇所、設備をカード1枚に1

*人間福祉学部人間福祉学科

カ所ずつ書き出していき、それをまとめて行く作業を行う。一コマでおこなうため、だいたい10人の演習で一人10枚程度のカード作成が、経験上は適切である。

FBDは、1953年に川崎製鉄（現JFCスチール）で、製品の質向上の技法として生まれた。KJ法でグループ化したカード群を性質別に分けて書き出していくことで、課題が生じた原因が特定できる²⁾。イメージとしては以下の図となる。

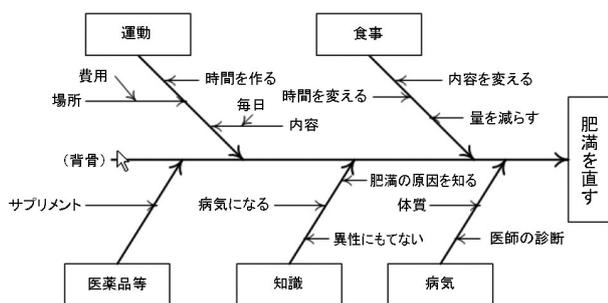


図1 特性要因図のイメージ
出典：gf.kotou.com

P図は、イタリアの経済学者パレートの所得分布法則から考案された図表で、一般に課題の要素の上位20%を解決できればその効果は完全解決の80%以上となるという考え方に沿って作図される。まず、要素の多い順に棒グラフを描き、最も多い棒から順に累積折れ線グラフを描くことで、解決すべき要素を視覚的に考えていくことができる。P図は、FBDで展開した課題の質的側面を主観的ではあるが量的側面として展開する技法である。

KJ法、FBDやP図は、生産現場や経営学演習で

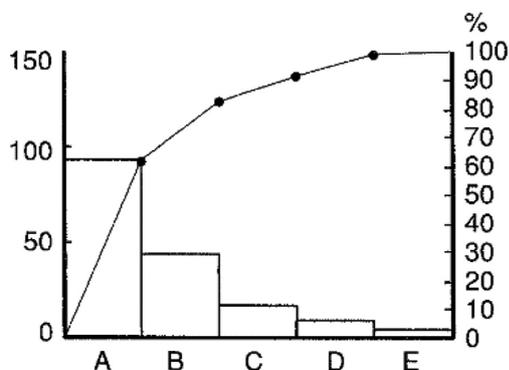


図2 パレートのイメージ
出典：bing.com/images

用いられる技法であるが、体験演習の後の課題発見、課題の要素分析に応用できる。

2.2 点検箇所

一コマ90分で疑似体験出来る箇所は、多くはない。その限りで、できるだけ多様な箇所を点検する必要がある。実際には、校舎は、2号館、10号館、8号館入り口、看護棟、ボローニアのトイレ、エレベーター、渡り廊下を点検した。校地では、2号館から正門の間、ボローニアへのスロープ、2号館から正門方向に設置されているスロープを点検した。

2.3 実際の点検結果

①校舎内

- ・ 10号館障がい者用トイレ
手すりが古く、多少ぐらついている。また、トイレトーパーが、便器のふたの上に置かれていて、車いすでは、ふたを開けることが困難であった。
- ・ 10号館エレベーター
間口が狭く、奥行きも短く、介護者が同時に乗り込むとドアにあたりそうになる。
- ・ 2号館 1階教室
ドアが外開きのため、介護者が一人の場合、ドアを押さえながら入ることがやや困難であった。
- ・ 8号館 1階渡り廊下
1階入り口の渡り廊下の幅が狭く、曲がる時に落ちる危険性がある。また通信制事務室の手前は段差があり、車いすでは通行できなかった。
また、溝のふた（グレーチング）の編み目の間隔が広く、前輪がはまるがあった。
- ・ 8号館 1階
エレベーターがないため、2階音楽室その他上層階へは車いすでの移動は不可能であった。
- ・ 看護棟 障がい者用トイレ
ドアストッパーが機能しにくい。かなり強い力で押し込む必要があった。力が弱いとスライドドアが跳ね返って、車いすがドアと支柱の間に挟まれてしまう。

②校地

- ・ 2号館から正門までの傾斜地
傾斜が、見た目よりもあり、また二方向に傾斜

しているため、ハンドブレーキのない介護型車いすでは、暴走したり転覆したりする恐れがあった。

・ 2号館のスロープ

傾斜がきつく、ハンドブレーキがない場合は、介護者の負担が大きい（止めながら下ろすには力がある）。

・ ボローニアへのスロープ

幅が狭く、90度前後で折れていて、かつ隅切りがないため、折れ曲がり角で手すりと接触する恐れがあった。

2.4 特性要因図の作成

点検結果を基にして、ブレインストーミング的グループディスカッションを行い、車いすの学生を介助したり、電動車いすや自走型車いすで校内を異動する場合の危険性や、困難性について要因を抽出した。ここでは、貼着剤付ラベル75×50を一人10枚程度配布し、点検結果から見いだされた問題点を一枚に一つ書き出して、それを読み上げるという方法をとった。結果は、以下の通りである。

表1 KJ法による課題抽出結果

抽出した課題	指摘数	備考
トイレのドアに挟まれる	12	看護棟
校舎内外の段差	8	2号館から8号館
スロープの傾斜がきつい	8	2号館外側スロープ
障害物が多い	5	2号館から正門
狭い	4	10号館エレベーター
前輪がはまる	3	グレーチング
通路の凹凸	3	2号館から正門
傾斜がきつい	2	2号館から正門
スロープの利便性が低い	2	ボローニアへのスロープ
出入り口が狭い	2	8号館
通路が狭い	2	ボローニアへのスロープ・8号館渡り廊下
自販機に手が届かない	1	ボローニア内外

特性要因図の要因分類は、以下の通りに整理された。

①車いす操作上の問題

- ・ 段差、障害物、グレーチング

②スロープ

- ・ 傾斜、幅、形状

③設備の不備

- ・ トイレのドア、エレベーターの大きさ

④施設・土地の不備

- ・ 段差、通路の凹凸、通路の幅

⑤その他

- ・ 自動販売機の形状

ここから、さらに見出しとして、以下のように二課題整理された。

①校地・施設・設備の不備

②車いす操作上の問題

これらの問題抽出と整理の結果、以下のようなFBDが描かれた。但し、画像処理の関係で、簡素化している。このように整理することで、車いすの構造や使用方法における課題と、大学の敷地形状、施設、設備の改善が必要となる課題に整理できる。

学生自身が問題意識を抱いて、今後の社会福祉士取得に向かうことが可能となる。

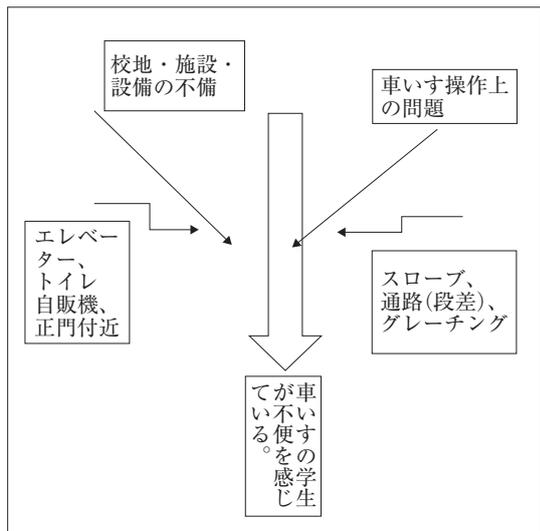


図3 特性要因図による分析結果

2.5 パレート図の作成

次に、前節の表から以下のP図が作成された。このように視覚化することで、学生が感じている主観が、一定程度量的に把握できる。それにより、より、具体的に改善策や、車いす学生への効果的な支援策を立案できるようになる。

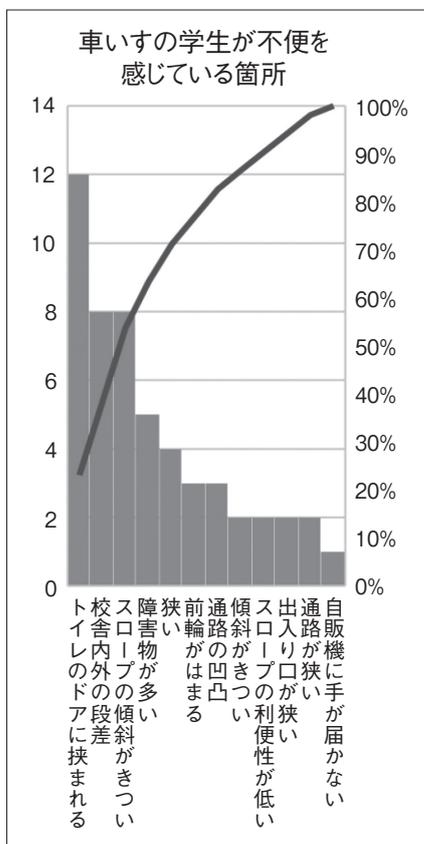


図4 パレート図による課題まとめ

(エクセルによる作図)

3 若干の考察

演習では、この結果を元に、施設等に関する改善策や、車いす学生への支援方法を討議しているが、それについては、割愛する。

ここでは、こうした経営学的手法を取り入れた演習により、学生にどのような効果が生じているかについて、検討を行いたい。

経済産業省は、社会人基礎力を提唱している。これは、以下の三要素によって構成されている。

- ① 前に踏み出す力 (アクション)
 - 主体性
 - 働きかけ力
 - 実行力
- ② 考え抜く力 (シンキング)
 - 課題発見力
 - 計画力
 - 創造力
- ③ チームで働く力 (チームワーク)
 - 発信力
 - 傾聴力
 - 柔軟性
 - 状況把握力
 - 規律性
 - ストレスコントロール力

この中で、アクションは、社会福祉士現場実習によって、獲得できる。また、チームワークは、演習と実習全体を通して獲得できる。それに加えて、ここで示した経営学的手法による演習課題解決によって、シンキング、とりわけ、課題発見力と創造力を獲得することが、可能となる。また、チームワークの中では、柔軟性と情報把握力をより教化することが、可能となる。

実際に、車いすを操作し、学内を点検することで、抽象的にではなく、具体的に、身体障がいとはどのような状態なのか、障害を持つということ、どのような不便、不利が生ずるのかということ、を、体得することができる。

その結果を、FBDにまとめることで、定性的ではあるが、バリアフリーとノーマライゼーションという概念について、具体的に感じることができ、P図を作成することで、自己の感覚を定量化し、課

題の解決について順番づけをする必要性について、考えが及ぶようになった。社会人基礎力中シンキングの習得が出来ていることになる。

課題を作図という手法で、可視化することで、個々人が状況の把握ができるだけでなく、情報共有もできる。その際に、ブレインストーミング的グループワークを行うことで、他者の意見を批判することなく受け入れ、それと自己の意見をすりあわせることで、全体を見通すことができる。バイステック七原則でいう、「受容」、「非審判的態度」を実体験できることになる。

社会人基礎力に即してみれば、チームワークとしての情報把握力、傾聴力と規律性が同時に習得できている。また、他者との共同作業を行う上で、自己の意見と他者の意見を組み合わせることから柔軟性も習得でき、これが習得できることで、ストレスのコントロールも自然に行えている。

本学が現在参加しているCOC+では、産業界が求める五つの力として、①俯瞰力、②共同推進力、③駆動力、④問題解決力、⑤地域思考力を挙げている。

ここで取り上げた演習の内容から、この五つの力の内、とりわけ、共同推進力、駆動力及び問題解決力を習得することができる。

作図というグループワークでは、どのように、各自の意見を集約し、どのような図を作成するかについて、意見がまとまる必要がある。独りよがりの意見を述べ続けているだけでは、一致点が見いだせない。

議論を戦わしながら、意見のすりあわせを行い、全員が同意できるコメントをまず、見いだす必要がある。これは、短時間では出来ない。演習では、作図に二コマを充てているが、作図そのものは、ほぼ1/2コマで完成できる。その他の時間は、ほとんど、意見の表出と、一致点の発見に費やされる。

前述したように、視覚化することで、課題が明確になる。それを前提として議論を行うことで、具体的な解決案が導き出される。教員は、手法を手引きするだけで、それ以降は、学生が自主的にグループワークを進めることができていく。その結果、COC+で挙げられている五つの力の内、ここで見たとおり三つの力を習得することができる。

4 おわりに

厚生労働省は、社会福祉士養成課程における教育内容を定めているが、相談援助演習の内容中、基本的なコミュニケーション技術の習得、アセスメント、チームアプローチ、社会資源の活用・調整・開発について、ここで述べたような演習によって、教授していることになる。社会福祉士養成課程の教育内容は、項目のみを記述していて、具体的な内容自体は記されていない。そのため、養成担当教員の個人的な努力によって授業も演習も組み立てられている。個々の項目をどのように教授するかについて、共通理解が無い現状にある。

社会福祉士養成について少なくとも学部内で共通基盤を構築し、共通認識をもって授業を展開すべきであろう。そのためには、学部FDや授業の相互見学がすでに行われているが、さらに、ここで述べたような演習も含めて受け持ち科目についての教育方法や教育実践を報告として文章化していくことも必要であると認識している。演習全体についての記述ではなく、その一部分のみの紹介にとどまっているが、こうした報告を積み重ねることで、共通基盤が構築できていくと確信している。

注

- 1) 特別区職員研修所編「特別区職員ハンドブック 2013」ぎょうせい 2013 P535
- 2) 特別区職員研修所編「特別区職員ハンドブック 2013」ぎょうせい 2013 P536

About the Lesson Improvement of the Social Welfare Assistance Technical Exercise by Active Learning

Michiyasu MASUYAMA

Outline: Use a cared for type wheelchair in a social welfare assistance technical exercise, and experience virtually the difficulty in walking by a physical disability or advanced age, and its care within the campus. I summarize the result by drawing a cause and effect diagram using a KJ method, and also create a Pareto diagram. by such a series of exercises, a student's is only disagreeable – it not only can carry out an understanding fixed about advanced age, but I can understand the social participation by such a state, and the difficult situation on a life.

Keyword: Active learning, Wheelchair virtual experience, Cause and effect diagram, Pareto diagram